

新 歌人群像

仙波龍英

二十世紀の光芒

宇田川寛之



撮影・磯谷良行

仙波龍英は、一九五二（昭和二十七）年三月三十日、東京都大田区に生まれた。本名・仙波龍太。仙波鉄三・澄江夫妻の長男である。二人の姉、長女公子とは十二歳、次女とみ子とは十歳年が離れていた。父は会社を経営。幼少時代、裕福な何一つ不自由のない生活を送っていたが、仙波が十三歳の時に父が急逝。そのことが多感な時期の仙波にどれほどの衝撃を与えたかは想像に難くない。

第一歌集『わたしは可愛い三月兎』（紫陽社）の巻頭五十一首の連作「少年」は一九六一年の記憶から始まり、当時の風俗や事件を描きつつ五年ほどの時間を歌う。

〈ローニン〉の大姉（ポンジョ）の姉
ふたり東洋の魔女より魔女である

が巻頭の一首。仙波の目に映った姉二人の存在を提示、姉たちとの愛憎が虚と実の間で歌われてゆく。父の急死を題材としたものが連作の後半で次のように歌われる。

父の死の記事を切りぬくおほあねの指
先までは狂つてをらず

葬列のなかに妾のむすめあり怒る姉妹
を吾はあきれたり

十三の晩秋に知ることのはをたまゆら 怯ゆ限定相続

ほかに〈戸籍には父のみの血を継ぐ姉があれば恐ろし本牧に佇つ〉があり、複雑な家庭事情を覗かせる。この父の急逝が仙波を後年創作活動に向かわせたのかもしれない。

藤原龍一郎との出会い

仙波は一浪のすえ早稲田大学に入学。三年生のとき「ワセダミステリクラブ」に入会、一年後輩の藤原龍一郎と出会う。すでに「短歌人」会員だった藤原の勧めで短歌を作り始め、一九七四（昭和四十九）年「短歌人」に入会する。春日井建や寺山修司の作品に強く惹かれたという。仙波の性格からすれば短歌結社という〈場〉は合わないように思えるが、当時の「短歌人」は高瀬一誌の牽引のもと、多くの若手歌人が集っていた。小池光、藤森益弘、吉岡生夫、永井陽子、武下奈々子らが活躍。その熱気に押されるように、仙波は積極的に会に参加、作品を発表してゆく。略歴にあえて「師事者なし」と記した仙波は、主宰者のいない、集団指導体制の「短歌人」の雰囲気心地好いものと思つたようだ。

「歌をヤッテイナイ人」を相手に…

一九八五（昭和六十）年五月、「わたしは可愛い三月兔」を刊行。既存の、歌集を中心とする出版社ではなく、詩人・荒川洋治の出版社からの刊行を選択した。装画は吾妻ひでお（改訂版「わたしは可愛い三月兔」は沖積舎より一九八九年八月刊行。高橋留美子の装画）。次の一首で、一躍仙波の名は歌壇で広く知れ渡るようになった。

夕照はしづかに展くこの谷のPARCO三 基を墓碑となすまで

消費文化の象徴であるPARCO（東京都渋谷区）、その滅びを仙波ははつきりと予感する。この一首は、八〇年代を代表する作品として評価され、我々の記憶に刻印された。「わたしは可愛い三月兔」には固有名詞が頻出する。消えゆく風俗を積極的に素材とした。サブカルチャーを短歌に持ち込み、詠み込んだ固有名詞が色褪せてゆくことを怖れなかった。詞書の多用、そして夥しい註釈。それは前例を見ない歌集の形だった。意識的な方法により描かれた作品は決して軽くない。ライト・ヴァースと一線を画し、誰とも似て

いない作品と言える。時にパロディと見えてしまう作品も、オーソドックスな短歌観のうえに成り立っていることは歌集を通読すれば分かるだろう。仙波は的確な批評眼をもって世界を見渡していた。しかし、作品の毒に読者の多くは眉をひそめたのだった。

終末はアルタから環太平洋地震帯ぞひ
広がりゆけよ

ムルギーのカレーすすれば新東宝「お
玉が池」のゆふひはあかく

極東のスペイン坂のかたすみにわれ泣
きぬれず雨に濡れるつ



昭和40年8月、父が他界する1か月前の写真。前列両親、後列右より龍太。姉とみ子。



早稲田大学時代の仲間たちと。左端が仙波龍英。

仙波自身「いわゆる歌壇の動向は全く顧慮せず、好きなように本づくりをいたしました。『歌人』から無視されるだろうと確信し、『詩』をヤッティナイ人』を相手に五七律の『詩』

を書き、まとめ、上梓した次第です。」「刊行に際して一番苦労したのは、吾妻ひでお氏から装画を受け取るまで。氏の遅筆は業界では有名なのだそうで、何度催促の電話を掛けたか知りません。また、たかが表紙がマンガだというだけで驚く人が多かったことに、驚かされました。」「(処女歌集の風景)」のちに挑発的な文章を記している。刊行直後、歌壇外を中心に注目を集め、やがて短歌総合誌から作品はもとより座談会でも起用されるようになる。しかし残念ながら仙波の存在は、歌

壇から受け入れられたとは言いがたい。以後亡くなるまで、短歌総合誌で作品の発表の機会は少なかった。歌壇が仙波龍英という存在を持て余していたのかもしれない。

ライト・ヴァースの荒波

そして、「わたしは可愛い三月兎」の狂騒から二年あまりのち俵万智歌集『サラダ記念日』が刊行され、商業的に成功を果たすことになる。仙波を見出し、積極的に発表の場を与えていた編集者石関善治郎は「俵万智の歌がベストセラーになった時、僕の身近で知る限り一番のショックを受け悔しがついていたのは仙波龍英だった。」「(短歌人)一九九三・三」と記している。

この時期「短歌の世界では、ライトヴァース世代ということで、一緒にたにされているんだよね。レトリックも文体も、方法論もぜんぜんちがうのに、同じように語られるのは本当に迷惑なんだ」(「メモワール仙波龍英」)と藤原に語ったという。また「愚生の作品を『ライト・ヴァース』の名のもとに、ほかの人々とひとくくりされるのは迷惑であります。中山明氏や俵万智氏、また林あまり氏等、よく一緒に扱われる人々にとっても、やはり

迷惑この上ないことと思われます」(「処女歌集の風景」)とそのレットテルの貼られ方に嫌悪感を示している。仙波はライト・ヴァースの先駆者として評価され、以後もその枠に組み込まれることが多かった。しかし仙波は、そのことに納得できなかった。そして、そのレットテルがきっかけとなり、仙波は短歌形式から距離を置いてしまったのかもしれない。やがてホラー小説に活動の場を移し、何冊もの単行本を刊行してゆく。

仙波は大学卒業後、数年間会社に勤めたが、自主的に退社したあとはフリーランスのライターとして生計を立てていた。ありとあらゆるジャンルの文章を書いていたというが、どれだけの分量の原稿を執筆したのか、仙波本人がいない今となっては確認できない。仙波龍英の名以外で多くの文章が書かれたようだが、しかし、作家として名を成したいという野心も消えることはなかった。

ひら仮名は凄じきかな

第二歌集『墓地裏の花屋』(マガジンハウス)は一九九二(平成四)年九月刊行。荒波経惟のふゆみの写真とのコラボレーション歌集である。今でこそ、このような試みは珍しくないが、

